

日本語におけるスペイン語からの借用語

— スペインの影響と
ラテンアメリカの影響に関する — 考察 —

渡 邊 志 保

1. 本論文の目的と意義

外国語から自国語に取り入れられた語は、「外来語」をはじめ、「気化語」「借入語」「借用語」「舶載語」「舶来語」「輸入語」などと表現されていたが、それらはみな同じものを指し、その意味するところも明確な区別はされていなかった。明治時代以前には主に「蛮語」や「舶来語」と呼ばれており、明治時代から使われ始めたのが「外来語」という呼び名である。現在では「外来語」および「借用語」が主に使われており、それぞれの名称の違いは田中（1988）によれば、「外来語」はアクセントなどほぼそのままで取り入れられたもの、一方「借用語」は借用した言語(自国語)の音韻体系や発音習慣に合うよう、修正が加えられたものをいうが、一般的には同義に用いている、という。本稿ではスペイン語からの借用語として取り入れられた語彙は、日本語化している以上、外国語から離れて、多少の修正は加えられて日本語になっているとみなし、統一して「借用語」を使用する。

近年、日本語において様々な外国語からの借用語が使用されているが、その多くが英語から借用された語彙である。また、分野別に見ると、一般的に医学系の用語はドイツ語・オランダ語から、音楽（理論用語およびクラシック）関連の語彙はイタリア語から、西欧料理の分野などではイタリア語・フランス語からの借用語が多いといえる。スペイン語も、いくらかの語彙は日本語に流入してきているが、日本語におけるスペイン語からの借用語に関する本格的な調査・研究は筆者の知るかぎりまだ見られない。歴史的に見ると、スペイン語と日本との関わりは古く大航海時代まで遡る。この大航海時代にスペインはアメリカ大陸を発見し、その開発に着手したことによって中南米にスペイン語が広まった。その結果、現在の日本語におけるスペイン語からの借用語を分析してみると、スペイン本国からのものとラテンアメリカからのものとに区別されることが分かる。本稿では、日本語の語彙体系の中へ取り入れられたスペイン語からの借用語がその起源によって日本文化にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究（ロマンス諸語からの借用語の研究）

日本語における借用語を研究したものには、同じロマンス諸語であるイタリア語とフラ

ンス語に関する研究がある。

古浦（1997）では、イタリア語からの借用語 477 例について音韻論、形態論、意味論、語彙論の立場から分析が行われている。意味論からの分析によると、音楽関連の語彙が 302 種で最も多く、第 2 位が料理・飲食店関連の語彙で 57 種となっており、音楽と料理の分野でイタリア語からの語彙全体の約 75%を占めていることが分かっている。また、日本語におけるイタリア語からの借用語には意味の拡大（その意味が原語よりも広くなる）の傾向が強いという結果が出ている。

一方、今田（1998）のフランス語からの借用語 316 例の研究によれば、その意味をめぐり考察がなされているが、フランス語から日本語への借用語の場合の意味変化は、意味の縮小（意味が原語よりも狭くなる）あるいは特殊化が多く、拡大するものが多いイタリア語に比べるとフランス語では逆である、という結果が出ている。

3. 借用語の歴史的背景

日本語における借用語を国別と伝来順によって叙述すると以下ようになる。

- | | |
|-------------|------------------|
| ①漢・サンスクリット | 平安・鎌倉時代(9～13 世紀) |
| ②ポルトガル・スペイン | 室町時代 (14～16 世紀) |
| ③オランダ | 江戸時代 (17～18 世紀) |
| ④イギリス・アメリカ | 明治時代 (19 世紀) |
| ⑤フランス・イタリア | |
| ⑥ドイツ | |
| ⑦ロシア | |

日本に最初にやって来た西欧人は室町時代末から江戸初期にかけてのポルトガル人、スペイン人であった。しかし、実際にはスペイン人はポルトガル人よりも 50 年遅れて日本に入り、滞在期間も短かったため、スペイン語からの借用語はポルトガル語からのものよりはるかに少ない。もともとスペイン語とポルトガル語はインド・ヨーロッパ語族の中でも特に似ているために、借用語を研究する際その語源を推測するに当たって、多くはポルトガル語に帰すると思われるが、語彙によってはポルトガル語とスペイン語が合流し、日本語になったものもあり、そのような語彙に関しては資料にもその記述がある。

4. 資料および収集した用例

4. 1. 資料

本稿の調査には『広辞苑 第 4 版』（岩波書店、1997 年、収録語数 22 万語）、『imidas'98 カタカナ語・欧文略語辞典』（集英社、1998 年、収録語数 3 万語）、『新明解国語辞典 第 4 版』（三省堂、1995 年）を使用した。これら 3 冊より、スペイン語から借用したとされるカタカナ語を抜き出し、それらについて、さらに『外来語語源辞典』（東京堂出版、1994 年）、

『基本外来語辞典』（東京堂出版、1990 年）、『コンサイス外来語辞典 第 4 版』（三省堂、1990 年）で借用した時代、語源等を調べた。

それらの原語のスペイン語の意味については『西和辞典』（小学館、1991 年）を用いた。

4. 2. 用例

スペイン語は、現在スペイン本国の他、ブラジル、ギアナ等を除く中南米各地で使用されており、使用人口は 2 億 1000 万人を越す世界四大言語の一つであるが、日本におけるスペイン語からの借用語は同じロマンス諸語であるイタリア語・フランス語からの用例に比べるとかなり少ない。4. 1. で挙げた資料の中から抜き出したスペイン語を原語に持つ語彙のうち、国名、地名、人名、通貨単位、固有名詞を省いた用例数は 136 語であり、前述の先行研究『日本語におけるイタリア語からの借用語』が 477 例、『日本語におけるフランス語からの借用語—その意味をめぐって—』が 316 例であるのに比べ、語彙数に差があることが分かる。

本稿では、原語はスペイン語であるが日本語には英語を経由して入ったと思われるものは除いてある。例えば、**tornado** はもともとスペイン語であり、1556 年にそのまま英語に取り入れられたため、英語もスペイン語も同じ綴りであるが、「トルネード」という日本語の発音や記述は明らかに英語であるため、そのような語彙はスペイン語からの借用とはみなさないこととする。「バニラ」も同様で、もとは **vainilla** でスペイン語であるが、日本語は英語 **vanilla** からの借用であると思われるため、省いてある。また黒人の旧称として「ニグロ」**negro**（本来は色の「黒」という意味でスペイン語では肌が黒い人にも使用する語）があるが、現在の日本では差別用語として使用されないため、用例からは削除した。

語彙の中には新語もあり、西和辞典に載っていないものもある。例えば、1992 年 4 月にペルーのフジモリ政権で起こったクーデターは、大統領自らが行ったクーデターであるため、「アウトゴルペ」**autogolpe**（auto- 自主的な + golpe 打撃・クーデター）と呼ばれる。また近年日本でブームになったアルゼンチンのダンス「タンゴ」に関連して、そのステップの「エル・チャッセ」「エル・マルチェ」等も現代用語として登場している。これらは借用時期やその起源がはっきり分かっているため、スペイン語からの借用語として分析対象に加えている。

5. 用例の分析—意味論的分析

5. 1. 収集した語彙

収集した用例 136 語を意味分野に従って分けてみる。分類した意味分野の内訳は筆者によるものである。

①音楽・舞踏(曲)

エル・チャッセ [el chasse]、エル・マルチェ [el marche]、コンガ [conga]、サパテアード [zapateado]、サルサ [salsa]、サルダーナ [sardana]、タブラオ [tablao]、タンゴ [tango]、チャチャチャ [cha cha chá]、パソ・ドブレ [paso doble]、パチャンガ [pachanga]、ハバネラ [habanera]、ファンダンゴ [fandango]、フォルクローレ [folklore]、フラメンコ [flamenco]、ホタ [jota]、ポルテニア音楽 [porteña]、ボレロ [bolero]、マラゲーニャ [malagueña]、マリアッチ [mariachi]、マリネラ [marinera]、マンボ [mambo]、ミロンガ [milonga]、ルンバ [rumba]

②植物

アセロラ [acerola]、アルファルファ [alfalfa]、イノンド [eneldo]、エニシダ [hiniesta]、カカオ [cacao]、カサブランカ [casablanca]、カランボーラ [carambola]、ガルバンソ [garvanzo]、サボテン [zapote?]、サルサ (サルサパリルラ) [zarzaparrilla]、タマリン ド [tamarindo]、チェリモヤ [cherimoya]、チャヨテ [chayote]、パパイヤ [papaya]、バルサ [balsa]、ルーダ草 [ruda]、レダマ [retama]

③動物 (魚を含む)

アルパカ [alpaca]、アルマジロ [armadillo]、カナリア [canaria]、グアナコ [guanaco]、コヨーテ [coyote]、コンドル [cóndor]、チンチラ [chinchilla]、ヌートリア [nutria]、ビクーニャ [vicuña]、ペヘレイ [pejerrey]、メリノ [merino]、メルルーサ [merluza]、メロ [mero]、ラマ [llama]

④自然・気象・地質

エル・ニーニョ [el niño]、カルデラ [caldera]、カルボナード [carbonado]、グアノ [guano]、ケスタ [cuesta]、パンパ [pampa]、メサ [mesa]、ラニーニャ現象 [la niña]、リアス海岸 [rias (スペインの大西洋岸に発達し、この地方で湾を ría と呼ぶのに由来)]、リャノス [llanos]

⑤料理・飲食・調味料

ガスパチョ [gazpacho]、カルメル [caramelo ポルトガル・スペイン]、サングリア [sanguria]、タコス [tacos]、タバスコ [tabasco]、テキーラ [tequila]、トルティーヤ [tortilla]、ナタデココ [nata de coco]、パエリャ [paella]、ハラペーニョ [jarapeño]

⑥生活

カサ [casa]、カバーニャ [cabaña]、クニエラ [quiniera]、シエスタ [siesta]、シャボン [jabón スペイン・sabão ポルトガル]、パティオ [patio]、フィエスタ [fiesta]、プラザ [plaza]

⑦衣類・織物

サヤ [saya]、ソンブレロ [sombbrero]、ビロード [veludo ポルトガル・velludo スペイン]、ポンチョ [poncho]、マンティーラ [mantilla]、メリヤス [medias スペイン・meias ポルトガル]、メリンス [merinos]

⑧挨拶・かけ声

アスタマニャーナ【hasta mañana】、アディオス【adiós】、アミーゴ【amigo】、オーレ【olé】、
グラシアス【gracias】、ブエノスディ阿斯【buenos días】、ムーチョ【mucho】

⑨人種・職業

インディオ【indio】、ガウチョ【gaucho】、チャモロ【chamorro】、ドン・ファン【Don Juan】、
ムラート【mulato】、メスティーソ【mestizo】

⑩政治・社会

アウトゴルペ【autogolpe】、インディヘニスモ【indigenismo】、ゲリラ【guerrilla】、コン
キスタドール【conquistador】、ボルサ【bolsa】、レコンキスタ【Reconquista】

⑪楽器

ケーナ【quena】、チャランゴ【charango】、バンドネオン【bandoneón】、ボンゴ【bongo】、
マラカス【maracas】

⑫闘牛

トレアドール【toreador】、バンデリリエロ【banderillero】、ピカドール【picador】、マタ
ドール【matador】

⑬敬称

セニョーラ【señora】、セニョリータ【señorita】、セニョール【señor】、ドン【don】

⑭歴史：4 例

アステカ【Azteca】、インカ【Inca】、クスコ【Cuzco】

⑮宗教

サクラメント【sacramento ホルガル・スペイン】、パドレス【padres】、モサラベ【mozárabe】

⑯薬物

カスカラ・サグラダ【cascara sagrada】、マリファナ【marijuana】

⑰スポーツ

ハイ・アライ【jai alai】、ロデオ【rodeo】

⑱その他

イスパノアメリカ【hispanoamerica】、エル・ドラド【El Dorado】、ケ・セラ・セラ【que
será será】、ピコ（単位）【pico】

5. 2. 意味分野別分類

以上の用例を、全体に占める割合およびスペイン本国起源の語彙とラテンアメリカ起源
の語彙とに分類したのが次ページの表 1 である。この表を見ると、音楽・舞踏（曲）、植物
名、動物名が多く、全体の語彙 136 種のうち、上位 3 位で 40.4%を占めることが分かる。
特に最も多い音楽・舞踏(曲)については、同じ音楽関連の楽器名を含めると、29 種となり、
全体の 21.3%を占めている。しかし、前述資料のイタリア語からの借用語を見てみると、

表1 意味分野別・起源別集計

順位	意味分野	語彙数	スペイン 本国 起源	ラテン アメリカ 起源	不明	(%)
1	音楽・舞踏(曲)	24	9	15	0	17.6
2	植物	17	4	8	5	12.5
3	動物	14	2	10	2	10.3
4	自然・地質	10	5	2	3	7.4
4	料理・飲食・調味料	10	5	3	2	7.4
6	生活	8	7	1	0	5.9
7	衣料・織物	7	7	0	0	5.1
7	挨拶・かけ声	7	7	0	0	5.1
9	人種・職業	6	1	4	1	4.4
9	政治・社会	6	3	3	0	4.4
11	楽器	5	1	4	0	3.7
12	闘牛	4	4	0	0	2.9
12	敬称	4	4	0	0	2.9
14	歴史	3	0	3	0	2.2
14	宗教	3	3	0	0	2.2
16	薬物	2	2	0	0	1.5
16	スポーツ	2	1	0	1	1.5
	その他	4	4	0	0	2.9
合計		136	69	53	14	100.0

イタリア語からの借用語彙 477 種のうち、音楽関連語彙は 302 種と借用語全体の 63.3%と圧倒的な数を占めており、これらと比較するとスペイン語からの借用語の意味分野の片寄りにはイタリア語ほど顕著でないといえる。

スペイン語からの借用語にはスペイン本国からの語彙とラテンアメリカ起源の語彙とが考えられるが、表によると全体 136 種の語彙のうち、スペイン（ヨーロッパ）起源の語彙が 69 種、ラテンアメリカ起源の語彙が 53 種と、さほど目立った違いはない。ところが、意味分野別の関係を見ると、上位 3 位を占めている音楽・舞踏(曲)、植物、動物に関連する語彙の起源は、ラテンアメリカ起源の語彙がスペイン起源の語彙の 2 倍になっている。これらの特徴を考えると、ラテンアメリカ独特の事物がいかに多いかが分かる。特に音楽分野ではラテンアメリカ起源の 15 例中半分を占める 7 例はキューバリズムの流れをくむものであり、次に多いのはアルゼンチンの音楽で 5 例である。また植物はラテンアメリカ原産のもの、動物はアンデス地域の高地や草原に生息するものの名称がかなり多い。

一方、闘牛などのスペイン発祥の競技に関する語彙や、敬称、挨拶などはスペイン本国の語彙であることは明らかである。また、生活用語もスペイン本国のスペイン語が語源であるが、日本語に借用されるとやや意味が縮小するあるいはずれが生じる傾向がある。例をあげると、「パティオ」はスペイン語では「中庭」の意味であるが、日本語では「南欧風の中庭」とその意味が限定されている。「衣料」の分野に入っている「ソンプレロ」も本来はいかなる種類でも「帽子」という意味であるが、日本語では「メキシコ・スペインで用い

られる広ぶちで中央が高い帽子」と限定されている。「カサ」「プラザ」はそれぞれ「家」「都市の広場」という意味であるが、日本語ではアパートやデパートその他の建物などの名として最近よく用いられる語になっている。「シエスタ」は「午睡」「昼寝」として一般的に理解されているが、本来は昼食後に寝る習慣のことであり、「うたた寝」や「白昼」という意味もある。

5. 3. 借用時期の考察

次に用例を借用された時期ごとに分類した。それらの借用時期は『外来語語源辞典』、『基本外来語辞典』、『コンサイス外来語辞典 第4版』の記述に従っている。辞典によって借用時期にバラツキがあるものは除外したが、3つの辞典のうち2つが同じ記述である場合はその時期を採用した。表2は表1の順位に基づいて、辞典に記述があったものに限り、借用時期を時代順にまとめたものである。136の語彙のうち、92語について借用時期の記述があった。表1は16位までであるが、表2では用例が4つ以下（すなわち12位以下）の項目については一つにまとめ、「その他の分野」としている。表3は借用時期が分かっている語彙に関して、スペイン本国からのものとラテンアメリカ起源のものに分けた表である。時代の「昭和」は第二次世界大戦以前を指し、「現代」は大戦後から現在までを指している。なお、表2の（―）はデータがないため数は明白ではないが、全くない（0である）わけではないことを示す。

表2 借用時期の意味分野別集計

意味分野	借用時期（時代）						合計
	室町	江戸	明治	大正	昭和	現代	
音楽・舞踏(曲)	—	—	—	—	7	12	19
植物	3	3	1	1	3	1	12
動物	—	1	4	—	1	2	8
自然・地質	—	—	1	—	6	2	9
料理・調味料	1	—	—	—	—	6	7
生活	1	—	—	—	—	—	1
衣料・織物	2	1	—	—	—	2	5
挨拶・かけ声	—	—	—	—	1	2	3
人種・職業	—	—	1	—	1	3	5
政治・社会	—	—	—	—	1	1	2
楽器	—	—	—	—	1	4	5
その他の分野	1	—	6	1	3	5	16
合計	8	5	13	2	24	40	92

表3 借用時期の起源別集計

起源別	借用時期（時代）						合計
	室町	江戸	明治	大正	昭和	現代	
スペイン本国起源	8	3	7	2	15	13	48
ラテンアメリカ起源	0	2	6	0	7	23	38
不明	0	0	0	0	2	4	6
合計	8	5	13	2	24	40	92

スペイン語からの借用語の大きな特徴は、イタリア語やフランス語に比べ、その時期が室町時代まで遡るということにある。特に動植物の名称は室町時代からコンスタントに関連を保ちながら語彙を借用してきたことが分かり興味深い。

しかし昭和から現代にかけての借用語は全体の 69.6%を占め、さらにその 4 分の 1 が音楽関連の語彙である。これは日本が世界中の国々と接触する機会が多くなり、スペイン語圏の国も例外ではなかったことが大きな原因であり、単なる事物の名称だけでなく、文化そのものを受け入れようという日本の姿勢がより強くなってきたことが伺える。大戦後は特にその傾向が強く、各分野にわたって語彙が借用されている。

起源別に見ると、室町時代にはスペインすなわちヨーロッパからの語彙しかなかったものの、江戸時代になるとラテンアメリカを起源とする語彙も借用されており、メキシコ辺りの現地語であるナウアトル語やアンデス地域のケチュア語などもこの頃既にスペイン語として用いられていたことが分かる。江戸時代に借用されたラテンアメリカを起源とする語彙は動植物名である。室町時代に比べ江戸時代のスペイン語からの借用語が少ないのは、江戸幕府によるキリシタンの布教弾圧、日本人の海外往来の禁止や海外貿易の統制強化による鎖国が行われたことも原因と考えられる。この時代はオランダ・中国との交易のみに制限されたため、オランダ語からの借用語が多く見られる時代である。昭和以降を見ると、大戦以前と現代ではスペイン本国のスペイン語をを起源とする借用語の数は昭和が 15 種、現代が 13 種とほとんど変わらないが、ラテンアメリカを起源とするスペイン語は昭和が 24 種、現代が 40 種とかなり増加している。

(1)室町時代の語彙

室町時代に借用された語彙 8 語のうち、歴史的にスペイン語とポルトガル語が統合したと思われるものを以下にあげる。これらの語の中には当時の発音から推測された記述に従って書き記されたため、その名称が統一されていない語もある。

・カルメル (カaramel、カルメロ)

ポルトガル語もスペイン語も綴りは【caramelo】で同じ。日本語では「軽目焼」と漢字が当てられた。

・サクラメント (サカラメント)

ポルトガル語もスペイン語も【sacramento】である。イタリア語も同じ綴りであるが、借用時期が室町時代であることから、イタリア語からの借用ではないことが分かる。

・シャボン

スペイン語は【jabón】で発音は「ハボン」、ポルトガル語は【sabão】で発音は「サバン」である。これについては、石綿 (1990) によると、16 世紀から 17 世紀にかかるころはスペイン語史上【ja】が「シャ」と発音されていたと考えられることから、その当時のスペイン語形は「シャボン」であったのではないかと推測できる。したがって、室町時代に借用された「シャボン」はポルトガル語ではなくスペイン語が語源で

はないか、という説が有力と思われる。

・ビロード

ポルトガル語の【veludo】、あるいはスペイン語の【velludo】が訛ったものと考えられている。日本語では「天鵲絨」と書かれる。

・メリヤス

スペイン語は【medias】で「メディアス」、ポルトガル語は【meias】で「メイヤス」であることから、「メリヤス」はスペイン語から借用されたと考えるのが自然である、という説もある。漢字では「莫大小」「目利安」と書かれ、唐ちりめんを指す。江戸中期の俳人である凡兆が去来と撰した『猿蓑』の中に「はき心よき目利安の足袋」という記述がある。日本語の「メリヤス」は織物のことを指すが、スペイン語、ポルトガル語の両言語とも「靴下」を意味する。これは当時の日本人がその生地を指すものと勘違いし、そのまま日本語になったのか、あるいはスペイン語やポルトガル語の意味が時代とともに変化したものかは資料がないため明らかではない。

(2)語源はスペイン語以外の語彙

現在は、スペイン語として扱われており、日本語への借用もスペイン語からの語彙であるが、もともとの語源は他言語であった語彙がいくつかある。それらを以下にあげる。

・エニシダ：ラテン語のゲニスタ【genista】が転訛したスペイン語のイニエスタ

【hiniesta】から。日本語では「金雀枝」「金雀児」と書かれる。借用時期は室町時代。

・カカオ：もとメキシコ語で、日本語では「加加阿」と書く。借用時期は江戸時代。英語では18世紀末から【cocoa】という別形を派生し、原料はcacaoで製品と飲料はcocoaというようになった。日本語のココアは英語からの借用である。

・コヨーテ：メキシコのナウアトル語から。

・コンドル：もとペルー語【cuntur】からスペイン語となった。

・ドン：もとラテン語の【dominus】では「主」の意味。

・ハイ・アライ：もとはバスク語。スペインのバスク地方で起こった球技。

・フォルクローレ：英語のフォークロアに由来するが、日本語ではその意味は限定され、特にアンデス地方の民俗性の強い音楽を指す。

6. まとめと今後の課題

本稿では日本語におけるスペイン語からの借用語を、その意味と借用された時代別に分析し、スペイン文化とラテンアメリカ文化の影響について考察した。その結果、スペイン語からの借用語数はイタリア語やフランス語に比べるとはるかに少ないが、それらの語彙の意味分野に大きな片寄りはなく多分野の語彙が借用されていることが分かった。日本との関わりは、スペイン本国のスペイン語を起源とする語彙は古くは室町時代から日本語に借用されており、一方のラテンアメリカを起源とするスペイン語も江戸時代から日本語に

入ってきていたため、ロマンス諸語の中では最も日本人との関わりが長い言語である。しかしそのように長い歴史があるものの、借用語が飛躍的に増えるのは昭和以降であり、特に現代は音楽、動植物の名称を中心とした独特の文化を持ったラテンアメリカを起源とする語彙が多く日本語に流入してきた。現在の日本語におけるスペイン語からの借用語はその数を見ればスペイン(ヨーロッパ)の影響もラテンアメリカの影響もほぼ同じように受けている、と言えるであろう。時代が進むにつれさらにスペイン語からの借用語が増える可能性はあるが、現代用語として新しい語彙も誕生している近年において、10年後、20年後に調査を行った場合、スペインとラテンアメリカとではどちらの影響をより受けるのか、借用語の全体像に大きな差が生じるのか、予測しがたいところである。

今回は意味分野別に分類した分析を行ったが、今後、さらにその意味をめぐる原語と借用語の意味の相違をまとめる考察を行うことも課題となるであろう。同じロマンス諸語であるイタリア語とフランス語がそれぞれ意味の拡大、縮小という全く逆の結果を示したように、スペイン語からの借用語はどちらの傾向が強いのか、あるいは伊仏両語のどちらとも異なる結果を示すことになるのか、非常に興味深いところである。また、スペイン語は母音を表す文字が a,e,i,o,u の 5 文字で、その発音もほとんど日本語の「ア、エ、イ、オ、ウ」に相当することはイタリア語に相似していることから、スペイン語から借用された語彙は少ないが、音韻論的分析を行うことは有意義であると思われる。あるいは派生語の形成を詳しく調べる統語論的分析を行い、先行研究のあるイタリア語と比較することによって新たな事実を明らかにしていくことも今後の課題となると思われる。

<参考文献>

- あらかわそおべえ『外来語概説―復刻版―』、名誉普及会、1986 年。
- 石綿敏雄編『基本外来語辞典』、東京堂出版、1990 年。
- 今田良信『日本語におけるフランス語からの借用語―その意味をめぐって―』、「ニダバ第 28 号」、西日本言語学会、1998 年。
- 榎垣実編『外国語辞典―増補版―』、東京堂出版、1966 年。
- 古浦敏生『日本語におけるイタリア語からの借用語』、広島大学文学部紀要第 57 巻特輯号 3、1997 年。
- 小林忠夫『カタカナ語の正体：外国語のルーツをさぐる』、丸善、1999 年。
- 堀井令以知編『外来語語源辞典』、東京堂出版、1994 年。
- 三省堂編修所編『コンサイス外来語辞典 第 4 版』、三省堂、1990 年。
- 『広辞苑 第 4 版』、岩波書店、1997 年。
- 『新明解国語辞典 第 4 版』、三省堂、1995 年。
- 『西和中辞典』、小学館、1991 年。
- 『情報・知識 imidas'98 カタカナ語・欧文略語辞典 CD-ROM』、集英社、1998 年。